

### 3 刳拔玄門について

藏富士寛

刳拔玄門とは板状の石材の中央をくりぬき、石室入口としたもので、一枚石の中央をくりぬいたものや、二枚の板石をコの字・L字状にそれぞれ加工し、それらを組み合わせてつくったものがある。構造の特異性より、幾度か注目を集め、集成も行われたが[村井1979]、近年では出雲地域における石棺式石室との関連からさまざまに論じられている[西住1993 角田1993]。中でも角田氏は出雲地域における石棺式石室の系譜を考察するうえで、横口式家形石棺など九州における古墳とのつながりについて論じており、刳拔玄門の存在を石棺式石室と九州の古墳との関連を示唆するものとして評価している。刳拔玄門は石棺式石室に通有のものであり、肥後地域で同様の玄門構造をもつ横穴式石室が存在することは、両地域間における何らかのつながりを想起させるものではある。石棺式石室の刳拔玄門はそもそも横口式家形石棺の横口部に起源をもつものと考えられており[山本1964]、九州における刳拔玄門の系譜を考えるには、江田船山古墳などにみられる横口式家形石棺を含めて検討して行く必要がある。以下に肥後地域における刳拔玄門を有する古墳についてみていくことにしたい。

九州において刳拔玄門を有する古墳は肥後地域にのみ存在し、現在では21例が知られている[高木1995] (第42図)。主体部の構造としては、1)妻入横口式家形石棺 2)通有の横穴式石室 3)玄室各壁体が1石もしくは数石で構成され、玄室が石槨状を呈するもの の3種に分けることができる。この中で、最初に出現するのは、1)の妻入横口式家形石棺である。出土遺物から、江田船山古墳や石之室古墳は5世紀後半～末葉(田辺編年T K 23～T K 47型式併行期[田辺1966])に位置付けられる。現在、妻入横口式家形石棺は肥後地域で10例存在し[長谷部1995]、その存続期間も江田船山古墳・石之室古墳の5世紀後半から下益城郡城南町塚原古墳群中に存在する北原1号墳の6世紀後半(T K 43型式併行期)までと、ほぼ1世紀にわたる。この中で石棺入口の構造が判明しているのは上述の2古墳のみであり、他の石棺式石室においても、このようなくくりぬきによる入口を備えている可能性を考える必要があろう。

続いて横穴式石室に刳拔玄門が採用されるわけであるが、年代がある程度推測されるもので、最も古くさかのぼるものは大野窟古墳であり、石室構造から6世紀中葉～後半の年代が考えられる。そして3)の江田穴観音古墳や鬼の釜古墳にみられるように7世紀前葉～中葉まで刳拔玄門を有する古墳は築造され続ける。

このように九州において、刳拔玄門の最古式のもの横口式石棺の横口部であることが理解できるが、では肥後地域にみられる横穴式石室の刳拔玄門と横口式石棺の横口部との関係は、どのように理解すればよいのであろうか。まず、玄門部立石を内側に突出させて石室袖部を形成するいわゆる九州型石室では刳拔玄門でなくとも、切石を組み合わせる袖部(両袖石・楣石・梱石)を構成して、実際刳拔玄門と同様の効果をもたらしているものが存在する。したがってこの場合、くりぬくか組み合わせるかという両者の違いは単なる技法上の問題に過ぎず、「刳拔玄門」であることにさしたる意味がない可能性があることには注意する必要がある。

横穴式石室が刳拔玄門をもつことの意味について、最も注目すべきは二重玄門の存在であろう(第46図)。刳拔玄門を有する古墳で、二重玄門をなすものは4古墳存在する。この場合、通有の袖部に刳拔玄門を付設するという形で存在するのであるが、まず通有の袖部と刳拔玄門の位置について検討してみると、通有の玄門の奥(玄室側)に刳拔玄門を配するのは、大野窟古墳のみであり、他の3基の古墳(天福寺裏山2・3号墳・桂原1号墳)は通有の袖部の前(石

室入口側)に刳抜玄門を設置する。大野窟古墳は通常の横穴式石室における二重玄門と全く同じ体裁を取るものであり、単に奥側の「袖部」が1石くりぬきになっているに過ぎない。ここで強調したいのは、後者であり、これらは通有の袖部の外側から刳抜玄門をはめ込み、視覚的にも「くりぬき」であることを十分に訴える構成となっている。また石室構造上、後ろに控える袖部が十分に楣石を支えており、刳抜玄門をその前方にはめ込むことに構造上の必然性はない。このような二重玄門の存在は刳抜玄門が単なる切石を組み合わせた玄門の代用としてではなく、「くりぬき」であること自体が重要な意味をもつことを示している。つまり意識のうえで「くりぬき」玄門が必要とされたのであり、したがって、横穴式石室における刳抜玄門の出現には、それ以前における同様の施設、つまり、妻入横口式石棺における「刳抜玄門」からの影響を想定する必要がある。

### 妻入横口式石棺と刳抜玄門

このように横穴式石室の刳抜玄門においても妻入横口式石棺との関連がうかがえることが分かった。九州では現在妻入横口式石棺が15例が確認されているが、特に肥後中部(緑川中流域、現在の下益城郡松橋・城南町周辺)への集中が目立つ。妻入横口式石棺の中で、くりぬきにより入口部をつくりだすのは、確実に分かっているもので、石人山古墳、浦山古墳、西隈古墳、江田船山古墳、石之室古墳の計5基がある。横穴式石室の刳抜玄門と妻入横口式石棺のそれとのつながりを如実に示すものとして、玄門に施された閉塞石受けのくり込みがある。入口構造の判明している5古墳のうち、閉塞石受けのくり込みを有するものは石人山古墳、江田船山古墳の2古墳である。5古墳の石棺形態をみると、石人山古墳、江田船山古墳は九州家形石棺分類Ⅱ類に、浦山古墳、西隈古墳、石之室古墳はⅣ類にそれぞれ相当する[佐田1972]。Ⅱ類の石棺は菊池川流域で盛行し、屋根形棺蓋に両小口部に一つずつ縄掛突起を有する舟形石棺につながりを持ち(高木恭二氏による石棺分類で北肥後Ⅰ型に相当[高木1994])、Ⅳ類はいわゆる環状縄掛突起を有する石棺で、肥後南部に分布の中心をもつものである[高木1979・80]。このように閉塞石受けのくり込みは肥後北部(菊池川流域)およびその地域的な特徴を同じくする石棺に限られ、肥後中・南部ではくり込みが施されないことが分かる。

次に横穴式石室における刳抜玄門の方をみると、閉塞受けのくりこみは4古墳(八角目3号墳・江田穴観音古墳・天福寺2・3号墳)において認められる。これらの古墳も菊池川流域に2古墳(八角目3号墳・江田穴観音古墳)、白川下流域に2古墳(天福寺2・3号墳)と白河以北に限られ、緑川以南の肥後中・南部地域には認められない。特に多くの刳抜玄門を有する横穴式石室が存在する宇土半島基部地域において、くりこみを有する刳抜玄門が1例も存在しないのは注目すべきことである。このように刳抜玄門と妻入横口式石棺の入口部との関連はこのような閉塞受けの加工方法においても現れている。

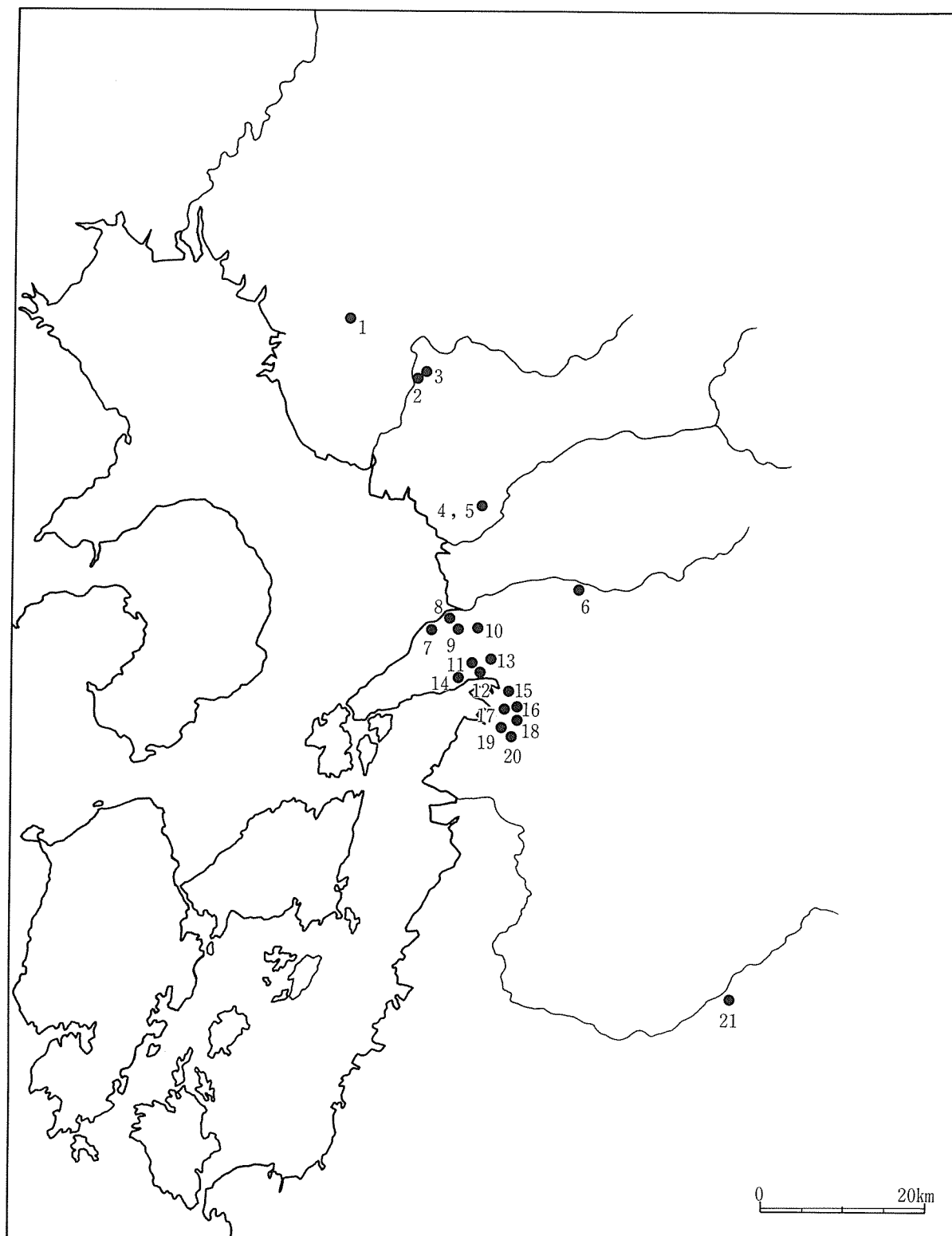
### 石室工人と石棺工人

肥後地域における舟形石棺は地域毎に形態的な特徴を有し、それは石棺工人集団のまとまりをある程度反映しているものであろう。その形態的な違いは一部家形石棺にも受け継がれているのは前述した通りであり、刳抜玄門における閉塞受けのくりこみの有無もこのような工人集団の違いを表しているものと捉えることができよう。また閉塞受けのくりこみという横穴式石室における刳抜玄門にみられた加工のありかたは、妻入横口式石棺にもそのまま認められ、横穴式石室における刳抜玄門の製作には、石棺製作に携わった工人の関与が想定できる。

肥後地域では舟形石棺の製作が盛んであり、その素材である阿蘇溶結凝灰岩の加工に習熟した工人が多数存在したことは容易に想像できる。肥後中・南部では6世紀初頭から前葉に、国越古墳（宇土郡不知火町）や物見櫓古墳（八代郡竜北町）にみられるような切石凝灰岩を多用する横穴式石室が築造され、以後、前方後円墳など多くの古墳の主体部として盛んに造られるようになるが、このような石室が構築される背景にはこれら凝灰岩の扱いに長けた石棺工人の関与が十分考えられる。肥後地域において、舟形石棺は5世紀代でその製作がほぼ終了し、家形石棺も6世紀になると、その多くが平入横口式石棺（石屋形）に変化する。石棺自体の製作は下火になって行くのであり、それに変わるものとして凝灰岩切石による横穴式石室の築造があるのであろう。石棺工人の横穴式石室築造に対する積極的関与、横穴式石室における刳抜玄門の採用は、如実にこのことを示している。

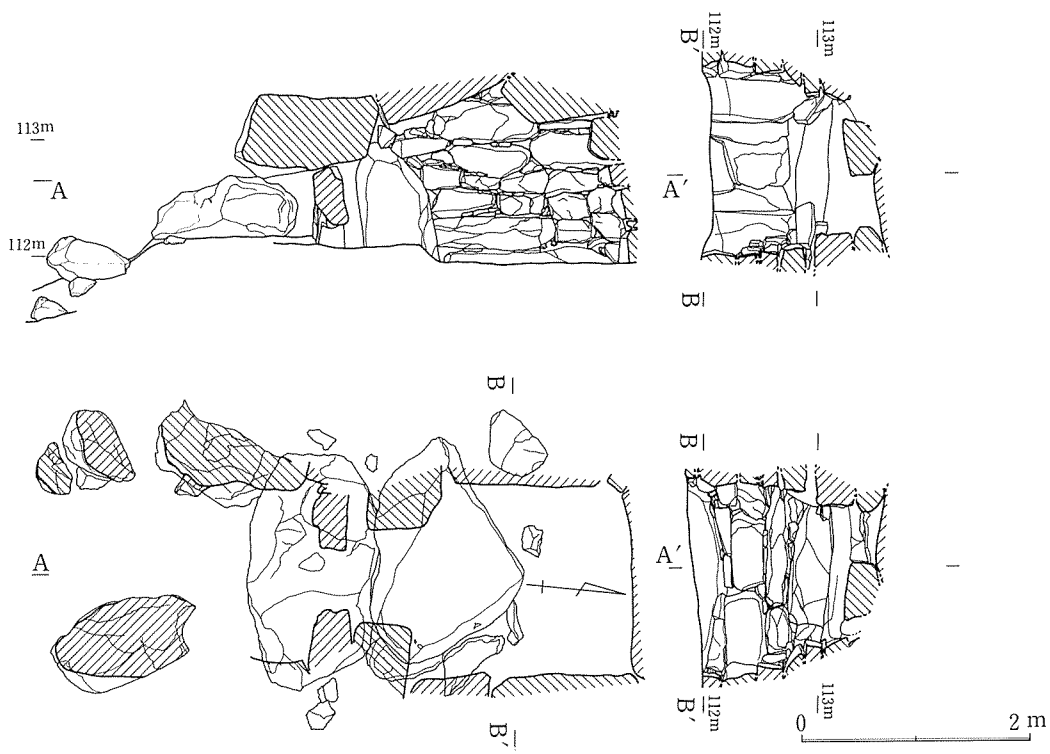
#### 参考文献

- 角田 徳幸 「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第10集、1993年
- 佐田 茂・高倉 洋彰 「九州の家形石棺」『筑後古城山古墳』古城山古墳調査団、1972年
- 高木 恭二 「環状縄掛突起を有する石棺について(1)(2)」『熊本史学』第53・54号、1979・80年
- 「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』第46巻 第5号、1994年
- 「石棺式石室と肥後―宇土半島基部における源流的要素―」『横穴式石室にみる山陰と九州―石棺式石室をめぐって―』古代の出雲を考える8、1995年
- 田辺 昭三 『陶邑古窯址群Ⅰ』研究論集第10号 平安学園考古学クラブ、1966年
- 西住欣一郎 「九州における横穴式石室の様相―刳抜玄門を中心として―」『肥後考古学会第204回例会資料』、1993年
- 長谷部善一 「第Ⅳ章 遺構と遺物」『竈門寺原遺跡』熊本県文化財調査報告書 第149集 熊本県教育委員会、1995年
- 村井 真輝 「第4章 B地区(岩立C古墳)」『五ツ穴横穴群』熊本県文化財調査報告 第34集 熊本県教育委員会、1979年
- 山本 清 「古墳の地域的特色とその交渉―山陰の石棺式石室を中心として―」『山陰文化研究紀要』5号、1964年

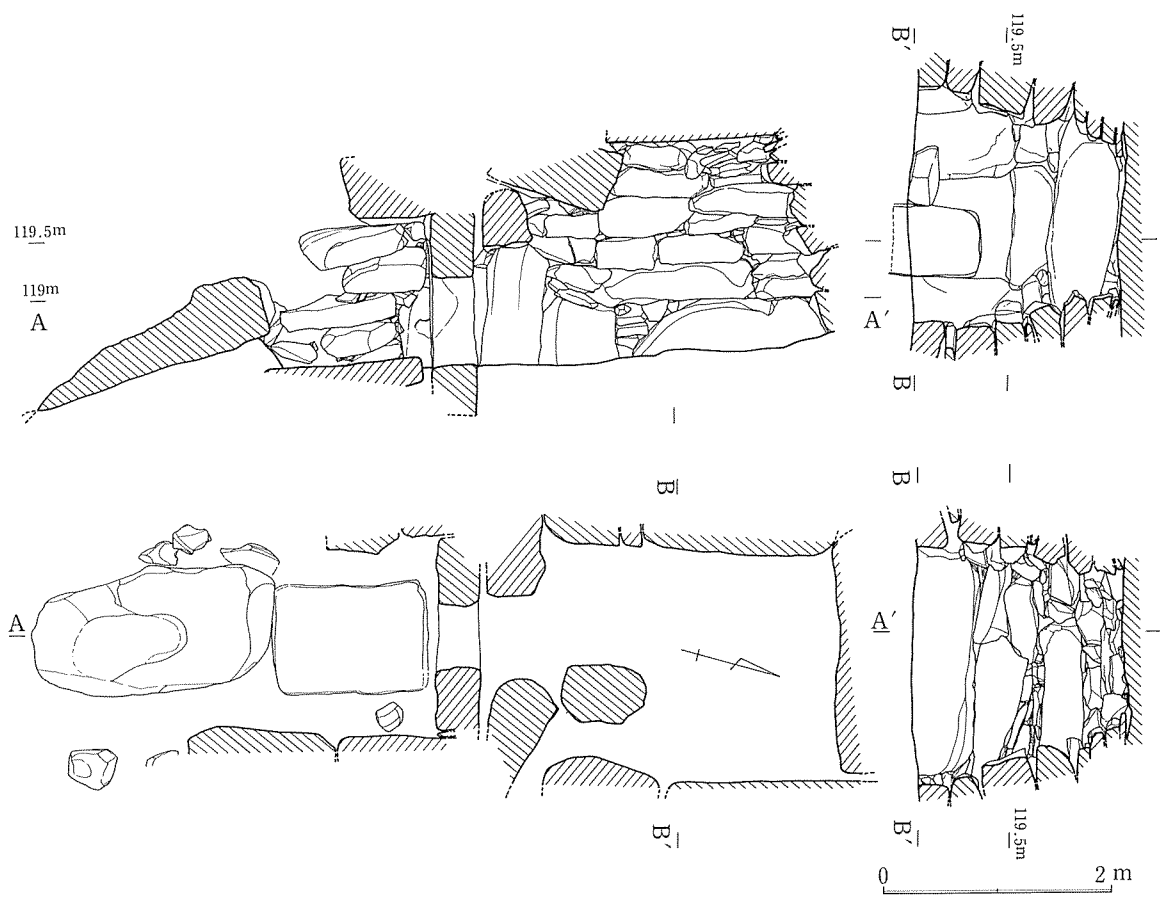


- 1 : 八角目 3 号墳 2 : 江田船山古墳 3 : 江田穴観音古墳  
 4・5 : 天福寺裏山 2・3 号墳 6 : 石之室古墳 7 : 御殿山古墳  
 8 : 梅崎古墳 9 : 城塚古墳 10 : 椿原古墳 11 : 不知火塚原 2 号墳  
 12 : 神の元 2 号墳 13 : 御領東原古墳 14 : 桂原 1 号墳 15 : 年の神 1 号墳  
 16 : 大野窟古墳 17 : 六反田古墳 18 : 岩立 C 古墳 19 : 上平原古墳  
 20 : 一ト口坂古墳 21 : 鬼ノ釜古墳

第46図 剝抜玄門を有する古墳分布図



天福寺裏山 2 号墳



天福寺裏山 3 号墳

第47図 天福寺裏山古墳群石室実測図